

「夜深去 妹相鴨」の訓について

賴華光

万葉集の卷十、一八九四

霞発 春永日 恋暮

夜深去 妹相鴨

(柿本人麻呂歌集)

の、第四、五句について考えてみたい。人麻呂歌集所出歌に多く見られるように、字数の十三字の略体表記の歌で、読添え②が幾通りにも考えられ、訓み方も多様である。第一、二、三句の訓は、多少の異同はあっても、寛永本を始めとする現代諸本の訓みに従ってよいと思う。しかし、第四、五句については、そう簡単ではない。まず、従来の諸訓を挙げてみよう。

(一)

1	よノふけゆけハ	いもニあヘルかも	旧訓、紀、西、その他
2	よノふけゆかハ	いもニあはムかも	代初書入レ、童
3	よノふけぬレバ		私注、
4	よふかくゆきテ	いもニあヘルかも	類、紀(左ニ)
5	よノふけゆきテ	いもニあヘルかも	考、略、古、京(左ニ緒ニテ)
6	よモふけゆくヲ	いもニあはヌかも	玉かつま(十三)

現代諸本の訓

7	よモふけゆくヲ	いもモあはヌかも	朝日、
8	よモふけゆくニ	いもモあはヌかも	新潮、小学館、桜楓社
9	よノふけぬレバ	いもニあヘルかも	岩波、
10	よるふけゆくニ	いもモあはヌかも	塙本、
11	よノふけゆきテ	いもニあヘルかも	注釈、新版新枝 茂吉、人麻呂歌集評釈

(二) 次に文字の訓みと解釈について考えてみたい。

(1) 夜深去

深 フカシー形容詞久活用。フカは語幹

フク ー下二段動詞、フケはその活用形。フカシの語幹、フカを活用させた語「更く」に通ず。

深ーフカシ

イ、空間的「浅し」の対「深し」

1 一二

底深伎阿故根の浦の珠ぞ拾はぬ

20 四四九一

大海の美奈曾己布可久思ひつつ

口、時間的

6 一〇四二 吹く風の音の清きは年深香聞
 19 四一五九 根を延えて年深有之神さびにけり
 ハ ものの程度

10 二二七一 草深三こほろぎさわに鳴くやどの
 6 一〇四四 紅爾深染西心かも
 深一フク

2 一〇五 我が背子を大和へ遣ると佐夜深而
 10 二〇四四 彦星の梶の音聞ゆ夜深往
 深一フカシの歌例20首（澤瀉「注釈索引」より）
 夜に続けた「夜ふかく」の歌例がない

深一フクの歌例39首（「万葉総索引単語篇③」より）
 去 ユク一四段活用動詞

ヌ 一完了の助動詞
 「夜深去」の訓について、澤瀉久孝「古径三」④の考えによると山部赤人の歌。

6 九二五 ぬば玉の夜深去者元、類等の古本

ヨノフケヌレバ…古改訓

←

ヨノフケユケバ…佐佐木武田共編「定本」澤瀉、佐伯共編「新校」

と、古本の訓にもどし、10、一八九四も前掲のように、ヨノフケユキテと訓んでいる。という訳は、万葉人は眼前に移りつつある経過、そのものに感動の中心がおかれ、時の流れの中に実景をみて、その実感をうたいあげるものだとする。

口訳 夜の更けぬれば…夜が更けて（更けたので）
 夜の更けゆけば…次第に夜が更けてゆくと
 (2) 妹相鴨

上述の表によって第五句の訓みを分けてみると

1. イモニアヘルカモ（表1、4、5、9、11）
 2. イモモアハヌカモ（7、8、10）
 3. イモニアハンカモ（2）
- 以上三種である。

1 イモニニアヘルカモ

ニ…対象
 アへ…合ふ、逢ふ、会ふ、四段動詞の已然形

ル…完了、存在、継続の助動詞「り」の連体形。接続、四

段動詞の已然形

カ…疑問、反語の詠嘆の助詞

モ…詠嘆の助詞。カモと使われ、後にカナになる。接続、

体言及び活用語の連体形

口訳II ああ、とうとう逢ったよ、逢っていることよ

万葉集の歌中

読添えのあるもの 七首
 明記してあるもの 十九首
 対応する語「爾」 二十三首 88%

例歌

- 9 一七〇〇 秋風に山吹の瀬の鳴るなへに天雲翔る雁 相鴨
- 10 二〇四九 天の川川門に居りて年月を恋来君 今夜会 可母
- 4 五一三 大原のこの市柴の何時しかと吾念妹 爾今夜相

11 二六二四

有香裳^{ヘルカモ} 眉根搔^{マヨネカ}き誰をか見むと思ひつつ日長^{ヒナガ}く恋ひし妹爾^{イモ}

4 六六一

相鴨^{アヘルカモ} 恋ひ恋ひて相有時谷^{アヘルトキダ} 愛しき言^{ユトツク}尽してよ長くと思はば

歌意

ことの成就、安堵、歓喜。その対象は妹が多数で恋の歌が多く、さまざまな恋に、待ちに待って逢えた喜び、通路も当時としてなかなか苦しかった。

2 イモ+モ+アハ+ヌ+カ+モ

モ…ヌカ (モ) 慣用語、希求表現

モ…主体。躊躇、不確実、不安と同時にひそかな執着をふくみ提示する詠嘆的な助詞

ヌ…打消の助動詞「ズ」の連体形

上代特有の希求の表現形式、打消の助動詞ズ (ヌ) は「不」の字が表記されることが多いが、これは「不」が表記されない

口訳||モ…してくれないかなア…。モ…ないものかなア……。

読添えのあるもの 十四首 (問題のあるものも含む)

対応語のないもの 一首 (11、二五八五)

明記してあるもの 三十一首

モ…ヌカ (モ) 二十八首

ニ…ヌカ 一首 (19、四三三二)

対応語のないもの 二首 (6、一〇一九・16、三八六七)

例歌

11 二五二三

鳴る神のすこしとよみてさし曇り雨^{アモ} 零^{シラ} 耶君^{ヤキミ} 将留^{トドメム}

11 二六八五

妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨毛^{アメモ} 零奴^{シラヌ}可其乎^{カミコ} 因将^{インサウ}為^{ナリ}

11 二三五五

愛しと我が思ふ妹は早裳死^{ハヤモンシ} 耶生^{ヤキ}けりとも我に 寄るべしと人の言はなくに (人麻呂歌集)

11 二三八四

我が背子は幸^{サキ}くいますと帰り来て我^{アハ} 告来^{ツグキ}人^{ヒト} 来^キ 鴨^{カモ} (人麻呂歌集)

4 七二八

人もなき国母^{クニモ}有梗^{アラヌカ}我妹子^{ワキモ}と携^{タツ}ひ行きて 副而^{ソノナリ}将^{サウ}座^サ (大伴家持)

参考 希求表現として外に

コセヌカモ

コセーコスの未然形、コスは下二段動詞

動詞の連用形について、他にあつらえ望む意を表す

補助動詞

…してくれ。…してほしい意

ヌカモ—既述

口訳||…してくれないかなア。ないものかなア。

読添えのあるもの 二首

明記してあるもの 七首

アリコセヌカモ 六首

ツギコセヌカモ 一首

例歌

11 二三八七

日並^{ヒナラ}べは人知りぬべし今日の日は如干^{イコノ}歳^{サイ}有^{アル}与^ヨ鴨^{カモ}

10 二〇五七

月重^{カサ}ね我が思ふ妹に逢へる夜は今^{イマ}之^シ七夕^{ナナヨリ}継^{ツグ}巨勢^{キョセ}

奴鴨ヌカモ

歌意

希求表現である以上、順調に運ぶ望みより望みがたいものを望み、ありたいと願う歌の多いのは当然で、不可能であるかも知れないと困難を予想しながら、もし、可能なあかつきは……しようと思ひ、その姿勢は前向きである。

ム：推量の助動詞で、一人称に使用されて意志を表すムの来ることが多い十八首40%

……してくれないものか、そうしたら……しよう。なんとかならないものかナァ……そうすると……しよう。

3 イモ十二アハム十カ十モ

アハ：アフの未然形

ム：推量、意志の助動詞、接続、未然形

口訳 逢おうよ、逢うだろうよ

アハムカモ

アハム(ト) 合 計

読添えのあるもと、二首

二十四首

二十六首

明記してあるもの、三首

五十四首

五十七首

例歌

10 一九〇四

梅の花しだり柳に折り交へ花にそなへば君爾相可母カモ

12 三〇五三

あしひきの山菅の根のねもころに止まず思はば於妹將相可聞カモ

10 二三四五

天霧らひ降り来る雪の消なめども於君合常流らへ渡る

7 一二五六

春霞井の上ゆ直に道はあれど君爾將相常たもとほ

り来も

10 一八九五

春さればまづ三枝の幸くあらば後相○な恋そ我妹

12 二九〇四

恋ひ恋ひて後裳將相常慰もる心しくは生きてあらめや

18 四〇八八

さ百合花由里毛安波牟等思へこそ今のまさかも愛しみすれ

4 六九九

一瀬には千度障らひ行く水の後毛將相今にあらずとも

13 三二八三

今更に恋ふとも君に相目八毛寝る夜も落ちず夢に見えこそ

4 五四一

この世には人言繁し来む世にも將相吾背子今ならずとも

20 四四六九

渡る日のかげに競ひて尋ねては清きその道末多母安波無多米

歌意

なんとかして逢おう、が逢える可能性が少ない。せめてもの望みをもって生きながらえよう。逢おうと思うが障りがあるので後になりと逢おう。夢になりと、と不安定な危惧の心を抱きながら、それに耐える苦しさ。最後の歌例は家持の歌で、家持が病臥して不遇、無常を感じ仏の道を願うものである。歌を拾って行く中に、逢おうと勢いづく心より、むしろ逢える望みの少ない耐えがたい情をおさめてゆく消極的な後向きの姿勢である。(三) 第四句と第五句の接続

例によって(一)の表によってみると、テ・バ・ニ・ヲの接続助詞

が挙げられる。明記してある文字がないので読添えは自由である。これらの接続助詞の読添えに関して

「テ・バ」について

『接続助詞によって前件と後件を接続する場合、無条件、列叙の「テ」の読添へが最も多く(三三二例)、順接条件の「バ」の読添へがこれに次ぐ(五四例)のに、逆接条件の「ド・ドモ・トモ」の読添へが非常に少ないのは、それが、列叙、順接の助詞に比して接続の際の屈折度が高く、転回点における必要度が強く要求されるからであろう。』

「ニ・ヲ」について

『「ニ・ヲ」は上代において逆接条件の接続助詞としての用法があり、これらの「ニ・ヲ」の表記を省略したと思はれる例も少数ながらある。ただこれらの例は、格助詞としての「ニ・ヲ」に比べると非常に例が少なく、その例さへも、人麻呂歌集の歌か、表記その他の点に読添へを支える条件のある場合に限られてゐる。』

『また、「ニ・ヲ」の逆接といふのは、「ド・ドモ・トモ」の逆接とはその表現の質に少しく差異があるやうである、「ド・ドモ・トモ」の逆接は、逆接そのものであるが、「ニ・ヲ」の場合は順接にも連続する場合も含んでゐる。それは「ニ・ヲ」が格助詞としての「ニ・ヲ」との間に本質的な差がないといふことに原因するのである。文の全体から逆接的な関係が投影することはあつても、「ニ・ヲ」そのものに、本来的な逆接の意味があるわけではないと言へるやうである。』

(蜂矢宣朗「読添へる助詞と読添へぬ助詞」『山辺道』第十号) 右の説から、10、一八九四番の歌を考えると、人麻呂歌集の歌

だし、四つの接続助詞のいずれも読添へは可能である。

(四)

(1) 「よ／ふけゆけバ」か「よ／ふけゆかバ」か

バが未然形について仮定の条件を表す「ゆかバ」より、已然形について確定の条件を表す「ゆけバ」の歌の方が万葉集では多い。というのは前述した様に、万葉人は、眼前にみた実景の感動をうたいあげる方が、頭であれこれ考えた観念的な歌より多かったということになる。

(2) 「よ／ふけゆけバ」か「よ／ふけぬれば」か

表の9、岩波の「よ／ふけぬればいもニあへルかも」も歌としては、当時、妹に逢いに行くのに、日が暮れるのを待って、やつと夜が更けて妹に逢った。と歌意は通る。が、澤瀉「古径三」で述べているように、上の句から訓み下してみると、一日中恋しく思ひながら、夜の更けるのを待っていた心の動揺が「ゆけバ」の方が伝つて来る。

(3) 「よ／ふけゆけバいもニあへルかも」(表) 1

「よ／ふけゆきテいもニあへルかも」(表) 5、11

「よモふけゆくヲいもモあはヌかも」(表) 7

「よモふけゆくニいもモあはヌかも」(表) 8

7、8は接続助詞ヲ、ニの違い。1と5、11は接続助詞バ、テの違い。弱いが屈折のあるヲ、ニから希求表現「モあはヌかも」に移る7、8と、順接条件バ、無条件列叙テからことの成就した喜び「ニあへルかも」に移る二通りの歌を比べてみるのに参考となる斎藤茂吉「人麻呂歌集評釈」の言葉を借りてみよう。(澤瀉「注釈」より)

『この歌には、さういふ伸々とした調べがあつて、結句の感動をば導くやうになつて居るところに注意すべく、「を」「し」「て」のあたりで弛むやうにして弛まぬ微妙な点も作歌修練上必ず参考になると思ふ。無論一首は楽な歌であるが、万葉の歌は皆さういふ特色を持つて居て好い。』

霞たつ春の永日を恋ひ暮し夜の更けゆきて

妹に逢へるかも

①喜び、成就の歌「夜が更けていって妹に逢つたことよ」

②希求の歌、「夜も次第に更けてゆくのに、あの娘は逢つてくれないものかナァ……」

ちよつと詠むと②の希求の歌の方が、切ない心に訴えるものがあつて心が引かれるようだが、弱年の頃南紀に近い泉南に育つた私には、霞がぼうと立ちこめた春の日ながを想うと、のんびりとした春の日は、屈折を育て、心の翳りのある歌より、初句より結句まで淀みなく一気に詠み下す明るい喜びの歌の方がびつたりとする。

19 四二九〇 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす

鳴くも

19 四二九二 うらうらに照れる春日にひばり上り心悲しも一人

し思へば

内向的な孤愁のうたいあげは、家持の登場を待たなければならなかつたと言えるだろう。

(4)「よふけゆかべいもニあはムかも」²

前述のような使われ方を除外して、ムを意志表現と考えてみると、歌として平板な感じがする。

以上によつて結局(一)の表5「考」、11澤瀉「注釈」の説に従い、12 二八六四 吾が背子を今か今かと待ち居るに夜更深去者歎き

きつるかも

に對する逢うことのできた喜びの歌がいい。と云つて表4を除いて、どの訓みにも問題がない。各自の考えによつて自由に訓んでいいと思う。

あと書き

この小稿を書き得たのは、ひとえに五年間御指導下つた蜂矢宣朗先生のお陰であり、いつも訓詁は單なる鑑賞、用例の多少、慣用度から決めることは危険で、他の条件と十分関連を持って、広い視野から検討し、一つ一つの歌について考察すべきであるというお言葉が身にしむ。なお一八九四の歌のゼミを一緒にしていただいた尾久幸子先生の御教示、この御二方に厚く御礼申しあげたい。

註

① 最少字数十字。

② 表記者の無表記省略を解説者が読添えたもの。右の歌のカナ書きがそれにあたる。

③ 「更下」「更深」「更降」「降」の表記に「ニ」を読み添えて「フケニケリ」「フケニツツ」とよませた現代諸本の例6例。

「総索引」では「ニ」を読みそえず「クダチ」と訓んでいる。現代では「夜が更ける」と書くが、万葉では「深」「布氣」「更降」「更深」「降」「闌」などとなっている。三更^{サヨク}(8、一五四五)、五更^{フヤトキ}(19、四一四一)……五更からの訓。「更」はサラニと副詞に

使った例6例^{イマサラニ}今更の例14例。

④ 「万葉古径三」 (中公文庫六〇〇七四頁)

参考文献

校本万葉集 岩波書店

万葉集総索引 漢字・単語篇 正宗敦夫編 平凡社

万葉集各句索引 塙書房

万葉集注釈索引 澤瀉久孝 中央公論社

万葉集注釈 澤瀉久孝 中央公論社

万葉集 塙書房

日本古典文学全集 小学館

日本古典文学大系 万葉集 岩波書店

新潮日本古典集成 新潮社

日本古典全集^新万葉集 朝日新聞社

万葉集 鶴久・森山隆編 桜楓社

版新校万葉集 澤瀉久孝・佐伯梅友共編 創元社

万葉古径 澤瀉久孝 中公文庫

読添へる助詞と読添へぬ助詞 蜂矢宣朗「山辺道」10号

古語大辞典 小学館

漢和辞典